

短歌の部

― 全体講評 ―

今回は、人生の悲喜こもこもの想いをうたった作品を中心に、自然の風景を詠んだ叙景歌や世相をモチーフにした歌など多彩な作品が寄せられました。その中でも、とくに親しい人への思いをつづった歌には心打たれるものがありました。愛する人との出会いや別れ、またいのちをつなぐ幼い子どもたちへの想い、年配の方の人生を見つめる深い心境など、読者の心に静かな感動を生む作品が印象的です。また自然や風景を巧みに写しとる歌にも優れた作品がありました。風景を捉える感覚の冴えや、新鮮なものの見方、独特の表現などに注目すべきものがありました。そして、応募作品全体に、短歌にとつてとても大切な歌の調べ、リズムが生かされた作品が多かったと思います。昨年より応募作品が少なかったのが残念でしたが、作品質は高く、歌人としての充実が感じられました。

山田 吉郎

市長賞

ア・リ・ガ・ト・ウの形にくちびる動かして昭和の夫は静かに逝けり

長田 啓子

― 講評 ―

長い時の流れをともに暮らしてきた夫への想いが哀切にうたわれています。静かな調べの中に、昭和という時代を生きてきた重みが感じられる優れた作品です。

議長賞

腕に抱く君の瞳を透かしみる雲の白帆に風をはらんで

武藤 直樹

― 講評 ―

腕に抱いた君の瞳と風をはらむ雲の白帆の取り合わせが、思慕の情を鮮やかに表現しています。リズムがよく、人生の出会いをうたうまぶしい一首です。

教育長賞

逃げ水の先に消え去るトラクター―土塊残す葉擦れ音する

吉見 章二

― 講評 ―

逃げ水の先に去りゆくトラクターの幻めいた風景が印象的。土塊の存在感と葉擦れの音が感覚的に結びつき、一幅の絵画を見るようなおもむきがあります。

俳句の部

― 全体講評 ―

令和七年度より「大和市さくら文芸祭」の名称が「やまと芸術祭」に改称されました。文芸は芸術の中の一つです。より質の高い俳句創作の歩を進めたいと思います。俳句は滑稽であると言われる。滑らかに考えることです。五七五の音律を中心に、説明や日記風にならず、飛躍や省略を利かせ、抽象的なことを具体的なものによって、詩的に表現する文芸を目指したいと思います。今回は前回より二名多い八十四名の方の応募を戴きました。季語の多い順から申しますと夏五十一句・春十七句・秋九句・冬六句・無季一句でした。その内容は夏の自然と語りあう日常生活の詩が殆どでした。私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩」と考えております。今回も詩情豊かな作品の中から選考させて戴きました。

来年もまた応募下さいますよう宜しくお願い致します。

梶原 美邦

市長賞

日陰なき一本道の長さかな

渡辺 利明

― 講評 ―

人生には夏の日陰のような涼しさは少ない。求める場所があれば幸せだ。が、癒しのない日常の勤めの行き帰りは途轍もなく長い時間と感ずる道のりとなる。

議長賞

ストローが吸い上げている五月晴れ

渡辺 郁子

―― 講評 ――

鬱陶しい六月ごろの梅雨時は何につけても心に暗さが蔓延る。鬱屈を晴らそうとカフェテラスへゆく。ストローでコップの中の晴間を吸い上げてみた。

教育長賞

薫風の褒美の笑顔ボランティア

坂野 光山

― 講評 ―

自らの意思で、無償で人や社会に貢献する人々へ、自然は新緑の季に爽やかな風に乗せて、青葉若葉の香りの褒美を与えた。彼等はお礼を笑顔で返した。

川柳の部

― 全体講評 ―

今年度、四十八句のご参加ありがとうございます。川柳は、皆さまが体感しているとおり作る人の豊かな心を、正直に、辛味の効いたユーモアで表し、世相をも映す短詩文芸です。今年度もバラエティに富んだ句が寄せられました。皆さまが川柳を身近に思ってくださいる証しです。そこで今回は作句の定型についてお伝えします。五・七・五とは、五音・七音・五音のことです。音(おん)の数え方は「あ・い・う・え・お……ん」の五十音は「一音」、つまる音「っ」は一音(がっこうは四音)、伸ばす音「ー」は一音(カレーは三音)「きゃ・きゅ・きよ」などのねじれる音は一音(キャンディーは四音)、で数えます。まず定型の音数での作句をお勧めします。リズムのある句は、人の耳と、心に残ります。そしてそのリズムで自身を深く見つめてみてください。

やまぐち 珠美

市長賞

ほしいものAI先に知っている

佐久間 厚

— 講評 —

「AI」人工知能の発達の功罪を「先に知っている」と描きました。功と罪を分けられぬ人の欲を「ほしいもの」で表し川柳の確かな視座を示しました。

議長賞

駅前が踊り彩り夏が来た

久光 夕仙

― 講評 ―

大和市の熱い祭りである阿波踊りの景を「踊り彩り」という動詞を連ねて、その躍動と熱量を伝えました。作者の「夏」はここからはじまります。

教育長賞

エコロジ―みんなで予約する未来

長谷部 誠一

― 講評 ―

より良い「未来」を迎えるには「みんな」の行動が必要です。安全を「予約する未来」へ今「エコロジ―」を進めようという思いが句から溢れてきます。